

緑川河口域における本年のアサリ漁業は？

～ 安定的なアサリ漁獲への最大のチャンス!! ～

浅海干潟研究部 生嶋 登

はじめに

かつて日本一を誇っていた本県のアサリ漁獲量は、昭和52年の65,732トンピークに減少を続け、平成9年には1,009トンにまで減少した。

漁場のアサリがほとんど生息しない状況の中で、資源管理の必要性の高まりから、漁業者による自主的な資源管理や行政と一体となった覆砂等の漁場整備が行われてきた。これらの取り組みの結果、漁獲量は、平成15年に6,877トン、平成16年に4,164トン、平成17年に6,520トン(農林水産統計年報速報値)と、6,000トン前後までに回復してきている。

本報告では、県内最大のアサリ生産地である緑川河口域において本年度実施したアサリ分布状況調査の結果から、平成19年以降、安定的にアサリを漁獲するために取り組むべき具体的な資源管理方策について報告する。

調査の概要

<アサリ分布状況調査>

県内の主要漁場である緑川河口域(約120定点)において、春期(6月頃)及び秋期(9月頃)に調査を実施した。

調査の結果

<アサリの分布状況調査>(図1)

春期調査結果

確認されたアサリは10mm未満の稚貝が主体で、これらは平成17年秋期発生群が主体であると考えられた。平均分布密度は1,374個/m²で、平成17年の486個/m²と比較して非常に高く、平成4年度以降で最も高い密度であった。

秋期調査結果

確認されたアサリは20mm未満の稚貝が主体で、これらは、平成17年秋期発生群と平成18年春期発生群が主体であると考えられた。平均分布密度は945個/m²で、平成17年の309個/m²と比較して非常に高く、平成4年以降で最も高い密度を示した。平成19年に漁獲対象として期待される殻長10mm以上の分布密度も733個/m²と平成17年の98個/m²に対して非常に高く、平成4年以降で最も高い密度であった。

まとめ

過去の調査結果から、秋期調査における殻長10mm以上のアサリ平均分布密度と翌年のアサリ漁獲量に強い相関があることがわかってきた。このことから、平成19年を予測すると、10,000トン前後の漁獲に結びつくだけの資源水準にあることがわかった。しかし、近年の傾向として、大量の漁獲があった翌年は漁獲量が極

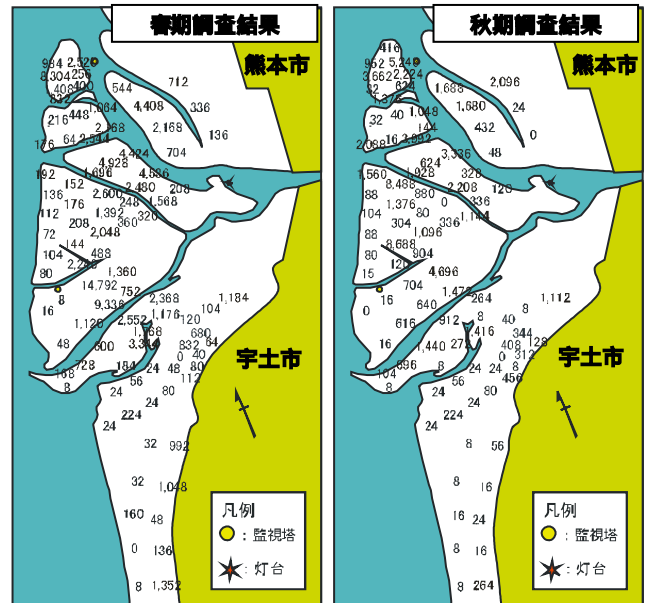


図1 緑川河口域アサリ分布状況調査結果(個/m²)

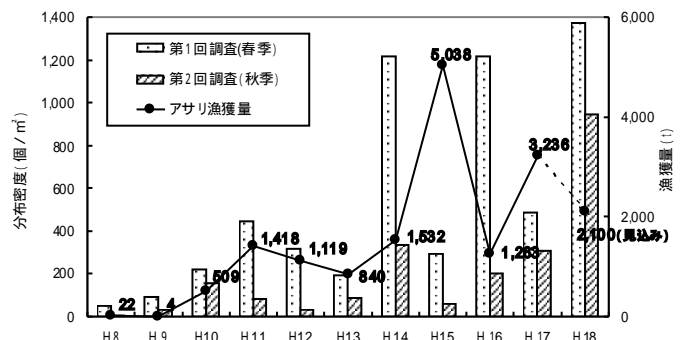


図2 緑川河口域のアサリ平均分布密度と漁獲量の推移

端に落ち込むことが多い(図2)。この要因としては、アサリ大量発生時の過剰な漁獲行為による漁場の攪乱が影響していると推察される。そのため、平成20年度以降も安定的に漁獲を行っていくためには、今回確認された大量のアサリ稚貝を計画的に漁獲していく必要がある。

具体的な取り組みとして、平成18年並みの漁獲量制限の継続(ネット制限を増やさない)、漁獲サイズの大形化(現状 殻幅13.5mm:4.5分貝 殻幅15mm:5分貝)の実施、休漁期間の設定や操業期間の短縮等、アサリを取り尽くさないよう更なる資源管理の徹底を行うことが重要である。今回確認されたアサリ稚貝の大量発生は、将来にわたってアサリ採貝漁業を安定的に行っていくための大きなチャンスであり、関係漁協で十分な議論を行い、今後の採貝計画を立てる必要がある。